



び復活のきざしをみせた。それは兵糧パンというかたちにおいてであつたが、その兵糧パンをもつとも本格的に焼いた中国地方の代表的藩は長州の毛利藩であつた。その長州は攘夷の先頭に立つたが、攘夷に勝算なしとみた藩の首脳は文久三年（一八六三）に藩士十九名をひそかにイギリスに留学させた。その中には伊藤博文、井上毅、寺島宗則、森有礼、五代友厚その他の俊秀がいたが、これらの人々は帰国後、パン食普及の先頭に立つた。

明治六年のヤソ教解禁以後は、中国各地に教会や教会関係諸機関がパン

中国地方のパンの現況

食普及の役割を果たしたが、その主なるものは明治十五年開設の高梁教会、同十六年開設の広島教会、十九年創立の広島女学院、二十年開設の岡山孤児院（石井十次）などである。

またアメリカからの帰還者や岡山、広島、廣島の師団、岡山、広島、山口の官立大学・高校などもパン食普及の役割を果たした。

二、現況

当地方のパンの現況はあらまし以下の通りである。

| 県別  | 総人口<br>(千人) | 市部<br>(千人) | 郡部<br>(千人) | 総パン年産類<br>(屯) | 市内     |        | 学給<br>(屯) | 県所在地 | パン食指数 | 業者数   | 消費電力  |       |    | 計 |
|-----|-------------|------------|------------|---------------|--------|--------|-----------|------|-------|-------|-------|-------|----|---|
|     |             |            |            |               | 市販     | 内      |           |      |       |       | kw    | kw    | kw |   |
| 鳥取  | 五七九         | 二九五        | 二八四        | 四、六八九         | 三、三三七  | 一、三三二  | 鳥取        | 一〇八  | 七〇    | 三〇一   | 一、五〇一 | 一、〇〇一 | 〇  |   |
| 島根  | 八二一         | 四一三        | 四〇八        | 五、〇五四         | 三、四四三  | 一、六一一  | 松江        | 八七   | 九〇    | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 〇  |   |
| 岡山  | 一、六四五       | 九五八        | 六八六        | 一六、〇四二        | 一一、六四二 | 三、四〇〇  | 岡山        | 一〇七  | 一六五   | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 〇  |   |
| 広島  | 二、二八一       | 一、三三〇      | 九五〇        | 二二、一七九        | 一八、三一六 | 三、八六三  | 広島        | 一二五  | 一三五   | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 〇  |   |
| 山口  | 一、五四三       | 一、〇八五      | 四七七        | 一三、八二五        | 一〇、六九六 | 三、一二九  | 山口        | 八二   | 一二五   | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 一、〇〇〇 | 〇  |   |
| 計   | 六、八七一       | 四、〇八三      | 一、七八七      | 六二、二三九        | 四八、八八四 | 一三、三五五 |           |      | 六七五   | 五     | 二     | 二     | 七  |   |
| 全国  | 九八、二七四      | 一、二〇三      | 一、六四八      | 五、八九六         | 五、〇三二  | 一、八六〇  |           |      | 八七〇   | 五     | 二     | 二     | 八  |   |
| 全国比 | 七・〇%        | 六・〇%       | 九・二%       | 七・三%          | 七・一%   | 七・一%   |           |      | 八・六%  | 九     | 一     | 一     | 八  |   |

以上の通りで中国地方の対総人口比率は七%であるが、対総製パン高比率は七・三%である。これは製パン高が若干全国平均を上廻っていることを示すものであるが、その内訳をみると市販パン七・一%、学給パンも同じく七・一%で、よく均衡がとれている。

このように当地方のパンが堅実な歩みをつづけているのは市部と郡部の人口比率が全国の標準型に近いからである。

つぎに県庁所在地のパン食指数をみると、全国平均を上廻っているのが

広島、鳥取、岡山の三市であり、下廻っているのが松江と山口の両市である。

業者数の対全国比率は八・六%であつて、これは製パン高比率の七・三%を上廻っているが、これは零細規模の業者が多いことを示すものである。しかしメーカー規模をみると三〇一〜五〇〇kw級五社、五〇一〜一、〇〇〇kw級二社であつて、これは全国平均を上廻る数字である。

## 鳥取県パン業界の歴譜

一、

現存する鳥取県のパン屋の老舗は鳥取市徳尾の有限会社亀井堂であり、その日産高は約一〇〇袋、鳥取県第一の実績である。

亀井堂が鳥取市でパン屋商売にふみ切つたのは明治三十六年の三月であつた。この店の開祖亀井貞蔵がパン屋をはじめたのは、当時鳥取市東町にあつた教会の牧師さんにすすめられたからである。その牧師さんはアメリカ人のバートレットという人で、この教会はいまも日本キリスト教団所屬の教会として愛信幼稚園なども経営している。二代目亀井忠治さんのはなしによると、亀井貞蔵がパン屋を志したのは、教会の牧師さんにパン屋商売は将来有望だからだと説かれたからであつた。当時この牧師さんはパン屋がなかつたので、家僕を使つて家庭で自分がつべるパンを焼いていたらしい。そんな関係で亀井さんはその牧師の家僕からホップだねの食パンの製法を習得した。しかし当時の食パンの需要はまことに微々たるものであつた。従つてどうしても米糰だねの菓子パンを揃えなければ商売にならなかつた。その菓子パンの製法を誰に習つたかは不明だが、おそらく京阪地方の職人を雇つたのだから。

鳥取市の郷土史家四宮守正氏の述懐談によると「鳥取地方でパンの存在が農村にまでも知られるようになったのは鳥取市に第四〇連隊が誕生した明治三〇年以後のことだ」とあるから、亀井堂が鳥取のパン屋の第一号というわけではないが、老舗中の老舗であることには変わりはない。

二代目の亀井忠治さんが鳥取連隊に入営したのは明治四二年であつたが、彼はこの兵隊生活でパンが兵隊にとつての必需食であるとの確信を得た。この点について前記の郷土史家四宮氏はこういつている。

「亀井忠治さん（八二才）は、軍隊生活の体験から、若ものたちがはげ

しい教練のあとでほしがるものは甘いアンパンであることを痛感した。それで除隊後も本職のパン屋の使命として、ぜひ兵隊に焼きたてのおいしいパンを供給したいものと念願し、上官を説得して自費でもつて陸軍糧秣廠まで出かけていき、遂に全国にさがかけて、隊内でパン焼直営の道をひらいた。こうしてただたべることだけが楽しみの兵隊たちの願いはかなえられたのである」と。

しかしこれは酒保のアンパンで、給食の食パンではなかつたが、その結果は予想以上の盛況であつた。この点について前記の四宮氏はこういつている。

「大正時代の農村の子供たちが、休暇をもらつて婦の兵隊のおみやげとして待ちこがれたものは、まんやかにヘソのあるアンパンであつた。村の子供たちをよろこばせたものは、兵隊のもつている銃でもなければ腰のゴボウ剣でもなくて、甘酸っぱいような、日ごろ全く口にしたことのないヘソパンの香りと味であつた」と。

当の忠治老は「何しろ税金はかからない、配達費もいらぬ独占企業だから儲かりましたね」といつているが、これで見ると軍隊がパン食普及の役割を果たしたことになる。

その忠治さんは鳥取県パン協の創立者であり功労者であり、現在も産者である。この人が産業功労者として勲六等旭日章をたまつたのは昭和四二年であつた。

二、

亀井堂以外に老舗らしいものはない。従つて殆んどが新しい戦後派パン屋ということになるが、その総数は約七〇軒。人口は約五八万人だから八、三〇〇人につき一軒ということになる。従つて大部分は直売本位の小規模店ということになるが、その中から比較的大規模なメーカーを抽出すると、あらし以下通りである。

上位一社の内訳

| 等級 | 社名          | 代表者   | 所在地    |
|----|-------------|-------|--------|
| A  | (有) 亀井堂     | 亀井寛   | 鳴取市徳尾  |
| 〃  | (〃) 原田パン    | 原田友次郎 | 米子市阿部  |
| B  | (林) 君司食品    | 田中志郎  | 鳥取市布勢  |
| 〃  | (有) 木村家     | 小椋俊明  | 米子市桃町  |
| 〃  | (林) 三共堂     | 原田豊次郎 | 米子市雨三柳 |
| 〃  | (有) 伯雲軒     | 山本昭二  | 境港市栄町  |
| C  | (有) だるま堂    | 山名早苗  | 鳥取市徳尾  |
| 〃  | (林) 宏栄      | 村上年光  | 〃片原町   |
| 〃  | 青木製パン所      | 青木弘之  | 気高郡青谷町 |
| 〃  | (有) 寿屋      | 乗本周一  | 米子角市盤町 |
| 〃  | (有) 神戸ペーカリー | 坂本定雄  | 境港市中野町 |

このうち米子市の卸業者は隣接の鳥根県東部地方に進出している。なおパン協はパン類自由販売以後、卸部門を株式会社「ケンパン」に再編成、現在も活発な商行為を行なっている。

(1) 組合史

発足 昭和二二年三月二八日鳥取県知事吉田忠一の認可を得て鳥取県パン商工組合を設立した。

発起人総代 柳沢愛之助(米子市) 発起人 児島卯吉(鳥取市) 亀井忠治(鳥取市) 土井正吉(鳥取市) 竹田春吉(鳥取市) 藤田孟(倉吉市)

昭和二二年三月八日創立総会を開催、理事および監事を下記の通り決定する。

理事長 柳沢愛之助、専務理事 亀井忠治、理事 土井正吉、平野正行  
藤田孟、監事 竹田春吉、山本茂隆

この構成は鳥取県を東部(鳥取市、八頭郡、岩美郡、気高郡) 中部(倉吉町(現在倉吉市)、東伯郡) 西部(米子市、境町(現在境港市)、西伯郡、日野郡)にわけると(現在もこのわけ方が基本となっている) 東部理事三名、監事一名、中部理事一名、西部理事一名、監事一名となる。

組合員の構成は東部一八名、中部五名、西部三名の二六名  
出資金および出資口数

出資金は一〇一〇〇円で二〇〇口 二〇、〇〇〇円

事務所 鳥取市吉方鳥取県食糧営団内に置く

昭和二四年三月三〇日組合員中鳥取地区の業者が組合を造り組合名で加入したため一四名が一名となり、西部地区が九名増加したため二一名となり、出資金を二〇〇、〇〇〇円に増額した。

昭和二四年五月 監事が変更田原清(西部) 河島岩蔵(東部) 選任

昭和二五年一月 組合員二七名となる。東部二名増、中部二名増、西部三名増、一名減 理事 亀井忠治退任、田原清選任、監事田原清退任、山本茂隆選任

昭和二五年二月一日 商工業協同組合法が廃止となり、中小企業協同組合法に移行したため必然的に鳥取県パン協同組合に変更する。

昭和二五年五月 鳥取県パン協同組合が鳥取県パン工業会(任意組合)を吸収合併した。

昭和二六年二月 小麦粉卸販売業者として登録

昭和二六年八月 組合員五一名となり二四名増加した。東部一七名増加 中部四名増加、西部六名加入三名脱退、主な理由フリークーパーン制実施に伴い製パン業者のホットンドが加入した。また東部地区の組合が解散したために増加、事務所を鳥取市今町二丁目二五番地に変更

昭和二六年一二月 出資金を八〇〇、〇〇〇円に増加する。

昭和二七年一〇月 事務所を鳥取市今町九番地に移転、購入した。出資金を二、〇〇〇、〇〇〇円に増加した。

昭和二七年一〇月 理事および監事を増員し下記の通りとする。

理事 柳沢愛之助(西部) 平野正行(東部) 亀井寛(東部) 田原清(西部) 藤田孟(中部) 鳥羽太喜藏(中部) 山本茂隆(西部) 秋山韶亮(東部)  
監事 村上善市(東部) 岩本怜(中部) 三島品子(西部)

昭和二九年五月 組合員三名減

昭和三〇年五月 組合員二名減、四五名

理事下記の通り変更 亀井寛(東部) 平野正行(東部) 藤田孟(中部) 田原清(西部) 鳥羽太喜藏(中部) 山本茂隆(西部) 秋山韶亮(東部)  
小椋乙市(西部)

昭和三十一年六月 理事定数を一名増加、東部より村上年光新任、監事村上善市、三島品子退任、田中志郎(東部) 山田撰智(中部) 加本とよ子(西部) 選任

昭和三十三年五月二五名 組合員一名減(廃業) 四四名  
理事変更 一名増員となり下記の通り 理事 亀井寛(東部) 田原清

(西部) 藤田孟(中部) 秋山韶亮(東部) 山本茂隆(西部) 村上年光(東部) 鳥羽太喜藏(中部) 田中志郎(東部) 山田撰智(中部)

退任 平野正行(東部) 小椋乙市(西部)

選任 村上年光(東部) 田中志郎、山田撰智

監事 小林重太郎(東部) 遠藤繁義(中部) 小椋乙市(西部)

退任 田中志郎(東部) 山田撰智(中部) 加本とよ子(西部)

昭和三六年五月 組合員五七名、一三名増

東部五名増、三名減、中部五名増、西部六名増 主な理由は学校給食の実施にしたがい指定工場全員が加入したため理事定員増加に依り四名が追加選任された。

理事 小林重太郎(東部) 遠藤繁義(中部) 原田友治郎(西部) 坂本定雄(西部)

理事増加に伴い監事変更

監事 西尾宗員(東部) 山下俊幸(中部) 乗本周一(西部)

退任 小林重太郎(東部) 遠藤繁義(中部) 小椋乙市(西部)

組合事業のうち商行為関係の事業を切はなし新に鳥取県パン商事株式会社を設立移行させた。理由は員外利用が多くなり県より縮少をかん告されたために学校給食部門を残し商行為は廃止した。

昭和三七年五月 出資金を六〇〇、〇〇〇円に減額

理由 商行為を会社へ移行したため、組合員五八名となり一名増

昭和三八年五月 組合員五三名となり五名減、東部二名減、中部一名減 西部二名減、廃業に依る

理事下記の通り変更 理事 亀井寛(東部) 田中志郎(東部) 藤田孟(中部) 田原清(西部) 秋山韶亮(東部) 村上年光(東部) 小林重太郎(東部) 山田撰智(中部)

退任 山本茂隆(西部) 富田吉明(西部)

理事 鳥羽太喜藏(中部) 遠藤繁義(中部) 原田友治郎(西部) 坂本定雄(西部) 富田吉明

昭和四〇年五月 理事 富田吉明退任(西部) 乗本周一選任(西部)

監事 岩本正(東部) 山下俊幸(中部) 柳沢栄藏(西部)

退任 西尾宗員(東部) 乗本周一(西部)

昭和四二年五月 組合員二名増、一名減

監事 松岡正義(東部) 加本政夫(西部)

退任 岩本正(東部) 柳沢栄藏(西部)

以上組合の概況を列記したが、理事として一〇年以上在勤者は下記の通り 藤田孟(中部) 二〇年、田原清(西部) 一八年、亀井寛(東部) 一六年、鳥羽太喜藏(中部) 一六年、秋山韶亮(東部) 一六年、村上年光(東部) 一一年、田中志郎(東部) 一〇年、山田撰智(中部) 一〇年

次に組合員の動向を見ると、組合成立以来の組合員数は一〇〇名に達し現在五三名となつて居る。この主な移動の原因としては戦後の食糧難に依り一時的に製パン業を行なつたが、食糧が出廻るにつれて技術的におとる工場または技術的な改革について行けない工場は古い工場であつても脱落して行つた状態で大量製産工場になりつつある工場は戦後に設立された工

場が多くこの比率を示めしている。

鳥取県東部中部地区パン工場（創業年調べ）

| 工場名      | 創業年    | 創業者   | 住 所          |
|----------|--------|-------|--------------|
| 亀井 井 堂   | 明治三十六年 | 亀井忠治  | 鳥取市西町一丁目二〇一  |
| 藤田製パン所   | 大正 九年  | 山田俊治  | 倉吉市大正町一〇七八   |
| 中山 太陽堂   | 大正 三年  | 藤田 孟  | 倉吉市瀬崎町       |
| 小林製パン所   | 大正一〇年  | 中山儀一郎 | 鳥取市川端二丁目     |
| 小倉製パン所   | 大正一二年  | 小林重太郎 | 鳥取市立川五丁目     |
| 遠藤製パン所   | 大正一一年  | 小倉房吉  | 鳥取県八頭郡家町郡家   |
| 竹田 大正堂   | 大正一四年  | 竹田春吉  | 鳥取県東伯郡大栄町由良宿 |
| 丹 波 屋    | 昭和 六年  | 中村久三郎 | 鳥取市古市        |
| 松岡製パン所   | 昭和 八年  | 松岡秋一  | 鳥取県八頭郡佐治村加瀬木 |
| 岩本昭和堂    | 昭和 三年  | 岩本俊雄  | 鳥取県若美郡若美町浦富  |
| 福井製パン所   | 昭和一〇年  | 福井修二  | 倉吉市昭和町       |
| 轉 宏 栄    | 昭和二二年  | 村上年光  | 倉吉市宮川町       |
| 田中製パン所   | 昭和二二年  | 田中静雄  | 鳥取市片原三丁目     |
| 君司食品株式会社 | 昭和二三年  | 田中志郎  | 鳥取市行徳        |
| 岩田ベーカリー  | 昭和二三年  | 岩田善藏  | 鳥取県東伯郡東伯町八橋  |
| 西尾製パン所   | 昭和二四年  | 谷口忠儀  | 倉吉市巾江        |
| 岡本製パン所   | 昭和二四年  | 西尾国藏  | 鳥取県八頭郡家町米岡   |
| 山崎製パン所   | 昭和二五年  | 岡本中一  | 鳥取県東伯郡三朝町三朝  |
| 山口製パン所   | 昭和二五年  | 山崎忠信  | 鳥取県三朝町本泉     |
| 山本明月堂    | 昭和二五年  | 谷口正男  | 鳥取市南本寺町      |
| 山本明月堂    | 昭和二五年  | 鳥羽太喜藏 | 倉吉市住吉町       |
| 山本明月堂    | 昭和二五年  | 山本武秀  | 鳥取県若美郡若美町岩井  |
| 山本明月堂    | 昭和二五年  | 山名早苗  | 鳥取市徳尾        |
| 山下製パン所   | 昭和二七年  | 小谷陸宏  | 鳥取県東伯郡赤碕町赤碕  |
| 山下製パン所   | 昭和二九年  | 山下俊幸  | 鳥取県東伯郡羽合町久留  |
| 山下製パン所   | 昭和二九年  | 井上二郎  | 鳥取県東伯郡東郷町松崎  |
| 青木製パン所   | 昭和二九年  | 青木忠明  | 鳥取県高部郡青谷町    |

|        |      |       |             |
|--------|------|-------|-------------|
| 河本製パン所 | 昭和三年 | 河本正年  | 鳥取県東伯郡泊村    |
| 佐伯製パン所 | 昭和三年 | 佐伯虎雄  | 鳥取県東伯郡美好    |
| 智頭旭パン  | 昭和三年 | 米原美智子 | 鳥取県八頭郡智頭町智頭 |
| 岩本権現堂  | 大正五年 |       | 鳥取県八頭郡用瀬町用瀬 |

鳥根県パン業界の歴史

一  
茶道で知られる松平不味公の旧城下町松江に英文学者として知られるイギリス人（ギリシヤ生れ）ラフカディオ・ハーンこと小泉八雲が、松江中学の教師として赴任してきたのは明治二三年であった。彼はこの土地を愛し、土族の娘小泉節子と結婚のち帰化した。松江にパン食の火をつけたのもこの小泉八雲であった。現在松江城の北側にこの小泉八雲の旧居とその記念館があり観光さきの一つとしてにぎわっている。

また明治三〇年には松江市雑賀町にカトリック教会が進出してきた。この教会は母衣町に現存しているが、この教会の初代牧師はフランス国籍のアングレスであった。

したがって松江の食パンは、ギリシヤ人とフランス人によつて呱呱のこえをあげたことになるが、当時のパン屋は一軒もない。

現存するパン屋を創業順に拾つてみるとざつと次の通りである。

島根県の老舗

| 創業    | 社名      | 代表者   | 所在地    |
|-------|---------|-------|--------|
| 明治四一年 | 石原開盛堂   | 石原才一郎 | 浜田市殿町  |
| 大正五年  | 松屋ベーカリー | 松崎武男  | 松江市中原町 |
| 〃八年   | すみだや    | 島田定道  | 松江市幸町  |
| 〃八年   | 辰屋      | 岡田太一  | 松江市西河津 |
| 〃一〇年  | 松本のパン   | 松本晋三  | 浜田市新町  |
| 〃一三年  | なかす号    | 中須宏   | 松江市天神町 |
| 〃一四年  | 川上屋     | 坂根嘉造  | 平田市平田町 |
| 〃一四年  | 喜久屋     | 須藤喜悦  | 八束郡穴路町 |
| 昭和二年  | 熊谷製パン所  | 熊谷美貞  | 益田市益田  |
| 〃七年   | 井谷明盛堂   | 井谷秀吉  | 大原郡木次町 |
| 〃九年   | 玉盛堂     | 鈴木喜造  | 簸川郡大社町 |

ざつとこんなところであるが、このうちのすみだやと辰屋は木村屋系統である。

これらでみてわかるように大正八年から大正末期にかけて誕生したパン屋が多い。これは大正七年の米そどうに刺激されてパンが代用食として脚光を浴びてきたことの名残りである。

二

県下のパン業者は現在八三名。人口は八二万人であるから、ざつと一人当り一軒であるが、その大部分は小規模業者であつて、めだつて大規模な業者はない。しかしその中から比較的規模の大きい業者を抽出するとあらし以下の通りである。

県下の大手しらべ

| 等級 | 社名       | 代表者   | 所在地     |
|----|----------|-------|---------|
| A級 | すみだや     | 島田定道  | 松江市幸町   |
| 〃  | 辰屋       | 岡田太一  | 松江市西河津  |
| 〃  | 松屋ベーカリー  | 松崎武男  | 松江市中原町  |
| 〃  | 渡部商店     | 渡部トシノ | 飯石郡掛合町  |
| 〃  | なんぼうパン   | 石飛健吉  | 出雲市今市町  |
| 〃  | 伸和食品     | 田村稠吉  | 〃塩治町    |
| 〃  | 松本のパン    | 松本晋三  | 浜田市新町   |
| B級 | なかす号     | 中須宏   | 松江市天神町  |
| 〃  | 井谷明盛堂    | 井谷秀吉  | 大原郡木次町  |
| 〃  | 木村家製パン所  | 勝部カメ子 | 出雲市知井宮町 |
| 〃  | まるやのパン   | 山本 駿  | 浜田市長沢町  |
| 〃  | 山形製菓     | 山形直幹  | 江津市嘉久志町 |
| 〃  | マルハベーカリー | 橋本茂之  | 益田市益田   |
| 〃  | 寿製パン所    | 芝田忠一  | 〃中之島    |

以上の通りでA級のトップも日産五〇袋程度にすぎない。

三

終戦から現在までの島根県パン協の役員の主なるところを拾つてみると次の通りである。

- 初代理事長 和田 才市 (昭二二〜二五)
- 二代目理事長 松崎 茂明 (昭二五〜三二)
- 三代目 〃 中須 宏 (昭三二〜四二)
- 四代目 〃 松崎 武男 (昭和四二〜)

なお、理事のうち初代から現在まで連続歴のある人に石原才一郎、鈴木喜蔵の両氏があるが、理事歴の古い人に大坂幹枝、島田定道の両氏がある。

初代理事長の和田氏はもと役人であるが、二代目理事長の松崎茂明氏（故人）は統廃期から理事長に就任して困難な転換期のかざとりをした人で、現理事長松崎武男氏はこの人の後継者である。



四代目理事長

松崎武男

### 岡山県パン業界の歴譜

一  
岡山市天神町にフランス人バツセロン・ヘンリー牧師が主宰するカトリック教会が進出したのは、西南戦役直後の明治十三年二月五日であった。この教会の牧師がつくつたフランスパンが岡山県のパンの走りということになるが、岡山県は西日本のパンの本場神戸に隣接しているから、ここには早くから神戸の製パン技術がもたらされた。しかしアメリカに出稼ぎした県民で帰国後パン屋をはじめたものもある。また岡山人村屋によつて米糘だねパン生地法が普及された。

しかしこのパンは岡山の旧制高校と岡山師団によつて普及の端緒が拓かれたといふことができよう。

### 二

岡山県下の老舗を挙げればあましまし以下の通りである。

### 県下の老舗しらべ

| 創業年代 | 社名      | 代表者名   | 所在地     |
|------|---------|--------|---------|
| 明治年代 | 磯田製パン所  | 磯田 猛   | 勝田郡勝北町  |
| 同 右  | 備北製菓    | 石田 兼太郎 | 高梁市新 町  |
| 大正年代 | 岡山人村屋   | 梶谷 忠二  | 岡山市西大寺町 |
| "    | 片岡甘美堂   | 片岡 健児  | 赤磐郡山陽町  |
| "    | 森本香栄堂   | 森本 貞義  | 和気郡和気町  |
| "    | ナラパン食品  | 村上 孝志  | 西大寺市西大寺 |
| "    | 忠臣パン工業所 | 鍋島 竜夫  | 玉野市宇 野  |
| "    | 大笠堂食品   | 小笠原 信義 | 児島郡東児島村 |
| "    | 三好満月堂   | —      | 倉敷市味 野  |
| "    | 玉島製パン所  | 阿田 弥太郎 | 倉敷市日之出町 |
| "    | 松竹堂パン   | 吉沢 義輝  | 浅口郡里佐町  |
| "    | 平川本店    | —      | 総社市総 社  |
| "    | 新 角 堂   | 能勢 浜夫  | 吉備郡昭和町  |
| "    | 植月製パン   | 植月 寛一  | 津山市上紺屋町 |
| "    | 松井製パン   | 松井 幸   | 津山市橋本町  |
| "    | 藤田製パン   | 藤田 茂夫  | 津山市山下   |
| "    | 岸本製パン   | 岸本 繁之  | 津山市川崎   |
| "    | 多胡商店    | 多胡 三郎  | 勝田郡勝央町  |



昭和初頭  
(企業整備以前)

|          |       |         |
|----------|-------|---------|
| 高田製パン    | 高山 弘  | 久米郡中央町  |
| 落合製パン    | 久良甚吉  | 真庭郡落合町  |
| ツルヤパン    | 込山行雄  | 岡山市富田町  |
| 込山日栄堂    | 小川豊一  | 御津郡加茂川町 |
| かもや製菓    | 光本静代  | 赤盤郡吉井町  |
| 光本製パン所   | 武内 覚  | 和気郡備前町  |
| 武内製菓     | 宮城健太郎 | 〃       |
| 宮城宝生堂    | 丹 生 哲 | 〃       |
| 丹生パン     | 亀井 毅  | 和気郡日生町  |
| 亀井 堂     | 南淵光治  | 〃       |
| 南淵製パン所   | 大賀道子  | 玉野市玉    |
| 大賀製パン    | 岡野広志  | 玉野市木目   |
| 岡野商店     | 佐藤一男  | 玉野市築港   |
| つるや製パン   | 井上比市  | 倉敷市栄町   |
| 太陽ベーカリー  | 小野宗一  | 〃 阿野町   |
| マルオベーカリー | 光守時央  | 小田郡矢掛町  |
| 光守商店     | 頼宮亀雄  | 総社市総社   |
| 頼宮製パン    | 尾藤常市  | 新見市新見   |
| 青柳製パン所   | 坂手民男  | 津山市川崎   |
| アサヒパン    | 赤松政夫  | 〃 坪井町   |
| 赤松製菓製パン  | 伊藤克美  | 英田郡美作町  |
| 中 村 屋    | 鈴鹿光次  | 久米郡柁原町  |
| 久米製菓商会   | 難波良雄  | 上房郡賀陽町  |
| 平田賀陽堂    | 小林豊稔堂 | 〃       |
| 小林豊稔堂    |       | 〃       |

以上の通りで明治創業二社、大正創業一八社、昭和初頭(戦前)創業二三社、合計四三社が戦前派であるが、これは岡山全県の業者一五〇社の約三〇%に相当する。

右のうち明治四一年創業の磯田京松(磯田パン)勝田郡勝北町)さんの場合をみると、氏が広島県三原市でパン屋をはじめたのは明治四一年でとくに二十一才であったが、その技術はアメリカから戻った三輪というペーカー仕込みのものであった。その磯田さんが女房の出身地である津山市郊外の勝北町でパン屋をはじめたのは明治四三年であったが、その製品の大部分は津山連隊に納入したといっている。

これはアメリカの製パン技術の導入経路と、軍隊とパンのつながりを端的に示す事例であるが、岡山村木屋が大をなしたのも岡山師団の御用商人だつたからである。

三

岡山県は人口一六四万人で、岡山市と隣接の倉敷市とその周辺に百万に近い人口が集中しており、この地域と瀬戸内海沿いの各都市がパンの主要市場を形成している。業者数は約一五〇社だから人口一万人強につき一社ということになるが、本県の主要製パン企業を挙げれば次の通りである。

主要製パン企業しらべ

| 創業期 | 社名              | 代表者名  | 所在地 |
|-----|-----------------|-------|-----|
| 大正期 | (大手)<br>岡山村木屋   | 梶谷忠二  | 岡山市 |
| 戦後  | 瀬戸内製パン<br>(準大手) | 三宅正男  | 倉敷市 |
| 戦後  | 武田食品            | 武田多三郎 | 岡山市 |
| 〃   | 朝日製パン<br>(中堅)   | 岡山村屋系 | 岡山市 |
| 〃   | 合児島学給パン組        | 永井樟夫  | 倉敷市 |

|    |         |        |        |
|----|---------|--------|--------|
| 戦前 | 玉島製パン所  | 河田 弥太郎 | 〃      |
| 戦後 | 林屋食品    | 林 臣少   | 都窪郡妹尾町 |
| 〃  | 三宅製菓本店  | 三宅 友一  | 川上郡成羽町 |
| 戦前 | 植月製パン   | 植月 寛一  | 津山市    |
| 戦後 | 赤松製菓製パン | 赤松 政夫  | 〃      |
| 〃  | 千代製パン   | 藪木 澄夫  | 久米郡久米町 |

以上の十一社が主要卸会社であるが、このうち一頭地を抜いているのが岡山木村屋であり、その実力は中国一、これにつぐものが広島の高カキベーカーである。なお岡山木村屋につぐ大手の瀬戸内パンは昭和三八年に企業合同会社として誕生した異色の会社であつて、この会社は岡山市の丸正製粉と密接につながっている。

#### 四

西日本随一の大手岡山木村屋の社長梶谷忠二氏は、現在岡山商工会議所会頭、日本パン工業会々長として広く知られているが、氏が歩んだ跡を要約するとあらまし以下の通りである。

#### 岡山木村屋年譜

◇…大正八年岡山木村屋創立

◇…大正九年陸海軍一週一回パン食制採用。岡山木村屋第七師団の在岡七部隊用主食パン一手納入御用商となる。大正十四年師団廃止まで継続納入。

市販パンは卸売を排し直売店主義に徹する。

◇…昭和十九年政府の企業整備要綱に則り岡山全市のパン企業を一社に統合、岡山パン製造株式会社を創立社長となる。

この新会社には岡山木村屋の社員は一人も参加せしめず、別に海軍指定梶谷乾パン工場を創立、これに岡山木村屋の社員を従業せしめた。その結果全国唯一の模範的企業合同体となり現存。

◇…昭和二〇年戦災の為全焼。工場疎開先で復興配給パン業務を遂行。  
 ◇…昭和二五年岡山市桑田町に機械化パン工場竣工。  
 ◇…昭和二七年パンの自由販売。株式会社岡山木村屋を創立、岡山パンの製品一手販売機関とする。

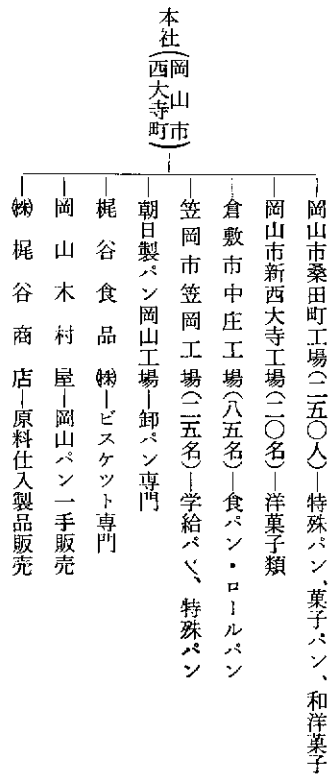
◇…昭和三九年倉敷市に日産一、〇〇〇袋能力の完全オートメ工場を新設、食パン専門工場としたが翌年ロールパンラインを併設、近く第三ラインを付設と決定。

◇…笠岡市金崎に笠岡工場竣工。

◇…昭和二七年から全部のパンをエンリツチする。

◇…岡山市新西大寺工場竣工。

以上の通りでこれを図示すると以下の通りである。



前掲の通りこの岡山木村屋は製品の卸売販売を一切行わず直営店と特約販売店制度を採用、岡山全県下の主要都市と広島県東部と兵庫県西部に特約販売店約二〇〇軒、直営店二〇店を設置しており、別に卸パン専門の朝日パン(株)を経営している。

この梶谷氏が産業功労者として藍綬褒章をうけたのは昭和三七年であつたが、氏は現状をもつて満足せず中国の梶谷から日本の梶谷への脱皮を念願している。

## 五

梶谷氏は地元岡山のパン協を昭和十七年に設立、昭和四一年までその責任者の地位にあつたが、現在は前述の通り日本パン工業会会長の要職にある。そんなわけで現在の岡山県下パン協の状況は次の通りである。

◇岡山県パン事業協同組合（理事長藤田茂夫―津山市）

◇岡山県学給パン協力会（理事長三宅正男―岡山市）

◇岡山県製パン事業協組（理事長三宅正男―岡山市）

## 山口県パン業界の歴譜

一  
聖フランシスコ・ザビエルが布教の目的をもつて来朝したのは、一五四九年（天文一八年）だつたから、いまを去る四二〇年前のことである。鹿児島に上陸したザビエルは、北上して京都につき、後奈良天皇に謁して布教の許しを乞うべく努力したが、当時は乱麻のごとくみだれた戦国時代であり、朝廷の権威は地に落ちていたので、無力な朝廷との折衝を断念、當時もつとも繁昌をほこつていた大内義隆の城下町山口に至り、城主に謁しここで耶穌教布教の第一声をあげた。

こうして山口は南蛮文化の洗礼をまつさきにうけることになつたが、その南蛮文化はパン食文化に外ならなかつた。そんなわけで山口の人々は早くから南蛮人の常食であるパンの存在を知つたのであるが、幕末になるとこの国に再び新しいパン食時代が訪れた。

それは「兵糧」としてのパンの備蓄の必要にせまられたからであるが、長州藩ではこれを「洋製麵麴備急餅」と称した。長州が他に先んじてこのような洋式兵食を採り入れたのは、この藩が藩士の一団を幕府の禁を侵してイギリスにおくり、洋式兵学の習得にあたらせたからである。

長州藩には吉田松陰以下の尊王攘夷の激派が多かつたが、藩政府に重きをなしていた周布政之助、村田蔵六（大村益次郎）らは、攘夷に勝算のな

いことを見抜き、将来にそなえて文久三年（一八六三）五月、藩士の五人伊藤俊助（博文）志道聞多、野村弥吉（井上勝）遠藤謹助、山尾庸三をひそかにイギリスに送つた。いずれも藩内の親戚知人にも秘しての密航であつたが、翌元治元年八月には四国連合艦隊の下関砲台砲撃事件がおこつた。この事件で外国の実力をいやというほど知らされた長州藩は、薩藩と共にイギリスに接近、尊王討幕へと進んでいつたが、この事件を契機としての本格的な洋式兵制への移行がはじまつた。兵糧パンの採用がはじまつたのもこうした動機からであるが、その技術指導に當つたものは中島治平という者であつた。この人の身許と技術系統は不明であるが、その指導の下に兵糧パンこと「洋製麵麴備急餅」の製造に當つたのは陶工大賀幾助であつた。

この陶工幾助が萩の藩庁へ試験焼きに補助金を出してほしい旨を記した請願書を出しているが、その全文は次の通りである。

御願申上候事 本書申出之趣きを以て、試験焼仰せ付けられ候事

御陣中の兵糧夏日の儀は、別して御貯え六ヶ敷しき処、洋人ども兵糧に相用い候パンとか申し候品、甚だ便利の由、申すことに付、中島治平さまより承り居り候而、此度備急餅と号し製造仕り度存じ奉り候

元来麦類を以て相製し候品にて、夏月にて凡そ四十日は相損せず、手輕のものにて試めに製造仕り度存じ奉り候 試験よろしく候而御用にも相立ち候儀に候得ば大局をも相開き度存じ奉り候 焼き調べ候に付察にてまず相試し申し可く候 御費用も少々有之申すべく候得ども廢物にも相成申すまじきに付、追而現在値を以て御払下仰せつけられ候様願ひ上げ候 手始の上は申出可仕候に付、御見分仰せ付けられ候様宜しく奉願上候

寅（慶応二年）五月

陶工 大賀 幾助

御世帯方御役人中様

慶応二年一月には薩・長両藩の盟約成立、六月には第二回征長軍が出発した。そして開戦となつたが、翌七月には家茂將軍が没したので、朝廷の

仲裁でこの無名の出兵は停止された。そして年末には孝明天皇が没し、十六才の明治天皇が即位されることになったが、この試験焼は長州が天下の大軍を迎え撃つために行なわれたのである。

寛

この請願書に添えられた試験焼きの費用見積りは概ね次の通りである。

一、小麦粉一〇袋（但考袋掛目五十匁入三分、此代銀貳拾五匁）

一、玉子一五斤（此代銀六匁）

一、木束 七把（此代銀拾匁五分）

一、職人 下拵より焼調まで手間貳人役（此代銀貳拾匁）

一、メめ 六拾一匁五分 此餅百七十枚式割苧枚代銀三分六厘二毛

右備急餅小割積前書の通りに御座候 尤も当地麦粉萩より下直に候得ば、少々下直に出来仕るべく候得共、凡そ萩物価の心得を以て申出仕り候

これで見ると試験焼は萩の城下でなく、どこかの港町（下関か防府あたり）で行なわれたらしいが、この申請に対して当局は銀四匁（六五兩）を下付している。

これは危急に直面した長藩が兵糧パンを重視して金に糸目をつけなかつたことの生きた証拠であるが、陶工がその任に当つたのは陶器を焼く窯を使つたからであろう。

幕末から明治初年にかけての相次ぐ対外紛争と内戦は諸藩に軍用パンブームを捲きおこした。それは長州の備急餅にたいして薩州が蒸餅と称し水戸が兵糧丸と称していたことから察するに難くない。

二

明治以後の山口県のパンについては、長州出身で乃木希典大将の親友だつた桂弥一を挙げなくてはならない。

彼は乃木大将と同じく萩の藩士であつたが、明治維新の際上京近衛兵団の幹部将校となつた。ところが脚氣を患つて重態に陥つたのである。そこで築地の外医の治療をうけたが、その外医は彼に木村屋の食パンを与え、これを常食とすることを強いたのである。パンにはビタミンが多いからこ

れを常食とした弥一はやがて全快した。それ以来彼は木村屋総本店の開祖安兵衛と親交を結んだが、食パンが脚氣の妙薬として知られるようになったのはこの桂弥一の人体実験の成功によるものである。

この桂弥一が郷里にもどつて郷土産業の振興に尽力するようになったのは明治二〇年代の初頭であつたが、彼はパンを常食としていた。しかし当時萩にはパン屋がなかつたので、門司の村上パンからわざわざ食パンをとりよせてそれをたべていたという。

なお、大正七年の米騒ぎはシベリヤ出兵のための軍用米大量買付がその発端となつたのであるが、このときの首相は長州出身の寺内正毅元帥であつた。そしてそのあとを継いだ政友会原敬内閣の陸相は同じく長州人の田中義一大将であつたが、彼は米騒ぎの跡始末としてパンの代用食運動を推進、軍隊にパンの給食制を採用した。全国に連隊御用パン屋が出現したのはこの田中大将のおかげであるが、このように山口県はパン食史とは深くつながっている。そういえば明治中期の鹿鳴館時代は欧化風潮が頂点に達した時期であり、そのあおりをくつたパンやケーキが大きく伸びた時代であるが、その欧化風潮の先頭に立つたのは幕末密航してイギリスでまなんだ長州藩士の伊藤博文と井上馨であつた。

三 県下の主なる老舗を挙げれば次の通りである。

| 創業期   | 社名       | 代表者   | 所在     |
|-------|----------|-------|--------|
| 明治一〇年 | 鍵本製パン餅   | 松行康博  | 下関市中の町 |
| 大正期   | 木下製パン餅   | 木下一夫  | 山口市下小鯖 |
| "     | 岩国製パン餅   | 湯川豊次郎 | 岩国市岩国  |
| "     | フジキベーカリー |       | 岩国市桜馬場 |
| "     | 木村屋      | 田中義昌  | 萩市西田町  |
| 昭和九年  | 松月堂製パン餅  | 井上薫   | 宇部市西岐波 |

これで見ると飛切りの老舗は下関市の鍵本パンということになるが、これは下関が本州最南端の港として繁昌した土地であることからいって決して不自然ではない。また大正期に山口の木下パン、荻の木村屋、岩国の岩国パン、フジキパンなどが相次いで誕生したことは、大正七年の米をうどうの影響とみるべきである。

このうちもと大内氏の城下町山口で大正十一年に創業した木下製パン主木下一夫氏のはなしによると、木下家がパン屋になつた動機は、当時山口の町でパンを焼いていたトルコ人にその製法を習つたからだといふ。こゝういふ点からいって木下パンは最初から食パンを手がけたことになるが、はじめのうちは出来そこないが山積した。それは酸味の勝つたパンであつたが捨てるのもつたないといふので、それを乾燥してラスク状のものにし、スパンと称して売つたものだといふ。それにしてもこの小都市でもかく食パン屋として商売がつづけられたのは、山口に旧制高校があり、この学生がパン党だつたからであつた。こゝういふ点からいって大学、高校などがパン食普及の拠点となつたことがわかるが、木下氏の回顧談によると、戦前要港として栄えた徳山に連合艦隊が入港すると、必ず山口の木下パンに大量のパンの注文があつたといふ。山口市から徳山市へ出るには防府市に南下してそれから東上する外なく、たいへんなみちのりであるが、木下パンはその度毎に荷馬車にパンを満載して悪路を往き来したものださうである。

これは当時徳山に有力なパン屋がなかつたことを示すものであると同時に、海軍がパン食普及の役割を果たしたことを示すものでもある。この木下パンの先代は産業功労者として戦後黄綬褒章をもちつた。

四

山口県の人口は一五四万人、主要都市は下関、宇部、岩国、山口、防府徳山であり、パン屋は約一三〇軒である。従つて人口約一万二千人につき約一軒といふことになるが、この中に日産一〇〇袋以上三〇〇袋以下の大手が三軒、五〇袋から一〇〇袋以下の中堅が七軒、二〇袋から五〇袋級の

準中堅が八軒ある。以下はその内訳である。

主要業者しらべ

| 創業期      | 社名     | 代表者名     | 所在地    |
|----------|--------|----------|--------|
| 明治一〇年    | 鍵本製パン  | 松行康博     | 下関市中の町 |
| 大正二年     | 木下製パン  | 木下一夫     | 山口市下小鱈 |
| 昭和九年     | 松月堂製パン | 井上薫      | 宇部市西岐波 |
| 終戦後      | (B級)   |          |        |
| 丸仲製パン    | 仲行弘    | 宇部市昭和町   |        |
| 天狗堂      | 山本英夫   | 岩国市今津    |        |
| 富士製パン    | 林滋     | 防府市緑町    |        |
| ハトヤ製パン   | 田中清吉   | 下関市東大坪   |        |
| キムラベーカーリ | 木村秀雄   | 〃 西大坪    |        |
| 長寿製パン    | 松村山純   | 〃 本町     |        |
| 神戸屋      | 古川士    | 萩市東田町    |        |
| 協和食品     | 磯田正一   | 柳井市宮本東   |        |
| 終戦後 (C級) |        |          |        |
| 勉強堂      | 野中益一   | 宇部市新天町   |        |
| 山海食品工業   | 福本隆次   | 小野田市南竜王町 |        |
| 富宮製パン所   | 岡田亘    | 光市虹ヶ浜町   |        |
| 東ベーカーリ   | 東早人    | 岩国市今津    |        |
| 春田製パン所   | 坂本覚    | 〃 多田     |        |
| フジキベーカーリ |        | 徳山市桜馬場通  |        |
| 岩本菓子店    | 岩本芳平   | 厚狭郡山陽町   |        |
| 武寿製パン所   | 宮尾幸夫   | 下松市末武上   |        |



## 広島県パン業界の歴史

広島県のパンは米国移民の帰国者によつて発展の第一歩をふみだした。そしてそれは他の地方にみられない特色である。

広島は米国移民の給源として知られているが、戦前の米国移民には出かせぎ根性のものが多かった。惜しみなくはたらいで小金がたまると帰国して生れ故郷にもどり、安定した老後の生活をたのしむというこの種の移民は、アメリカにとつて決してたのしい移民ではなかつた。低賃金で米国籍労働者の待遇改善を阻止する日本人労働者が、アメリカ社会に毛ざら いされるようになった所以であるが、日露戦争後アメリカに日本移民排斥の火の手があたり、日米関係が次第に悪化していつたのは、こうしたところにも一半の原因がある。

ところでこのアメリカ移民の帰国者は、郷里に戻るとかの地で身につけた職業的経験を足場にして、次々に新しい職業分野を開拓していつた。その一つがベーカリーの経営である。広島市の古老のはなしによると、広島には栗須ベーカリー、むさし屋などのパンと洋菓子の専門店があつたが、これはアメリカから帰国した人によつてはじめてられた店だつたということである。これはこれらの店から米国式の製パン技術が拡がつていつたことを示すものであるが、もう一つ広島の特徴として挙げなければならないのは、軍隊の果たした役割である。

日清戦役のさい広島に大本営がおかれたが、これでもわかるようにこの土地は軍部でもあつた。それは広島に師団がおかれたばかりでなく、隣接の呉市は横須賀、佐世保、と肩をならべる軍港でもあつたからである。陸海軍とパン食の深い因縁については、本文で詳しく言及したからここでは繰り返さないが、機械化製パンのトップを切つたのが海軍だつたことから、この点は察するに難くないであろう。日清・日露の両戦役には軍用乾

パンが大量に用いられたが、広島でもこれがつくられた。こうしたことがこの土地の製パン技術の向上に寄与したことも考えられる。

広島第五師団と呉海軍工廠の御用パン屋に明治十九年創立の寒月堂と称するベーカリーがあつたが、これは昔の広島県の代表的ベーカリーであつた。

米国籍のミス・デイーンズを校長とするミツシヨン・スクールの広島女学院が設立されたのは、欧化風潮が最高潮に達した明治十九年であつたがここではパンの給食とまではいかなかつたが、病人や生徒にたいしては度々パンやスープが与えられた。これが西洋風の食生活を日本人の家庭にもちこむ呼び水となつたことはいうまでもない。

軍部の広島は同時に学都でもあつた。旧制高校や大学がパン食の普及に役立つたことは、中村屋が一高・東大、進々堂が京大を廻りどころにして伸びていつたことから疑う余地がない。

### 二

広島県の人口は二二八万人で中国第一の大県である。そしてこの県には人口五〇万人の広島、二二万五千人の呉、二〇万四千人の福山などの中都市がある。そしてこの県下には二二〇軒内外のベーカリーがある。これは人口約一人につき一軒という分布であるが、その大部分はご他聞にもれず戦後派ベーカリーである。

いまこのパン業者の中から主なる戦前派を抽出してみると、あらましの下の通りである。

### 戦前派の顔ぶれ

| 創業   | 社名       | 代表者    | 所在地    |
|------|----------|--------|--------|
| 大正二年 | ムラコシパン   | 村越 郁之助 | 広島市旭町  |
| 戦前   | モーコ製パン工場 | 室戸 一良  | 大竹市新町  |
|      | フジヤ製パン   | 藤井 嘉太郎 | 呉 市西谷町 |

|    |         |      |         |
|----|---------|------|---------|
| 大正 | メロンパン   | 中塩春馬 | 呉市本通    |
| 戦前 | 永井パン    | 永井勝一 | 安芸郡安芸町  |
| 〃  | 西林製パン   |      | 安佐郡高陽町  |
| 〃  | 川相製パン所  | 川相長市 | 尾道市栗原町  |
| 〃  | 市川商店    | 市川仁市 | 尾道市十四日町 |
| 〃  | 広川日進堂   | 広川博重 | 福山市東深津町 |
| 〃  | チドリヤ製パン | 井上林三 | 府中市高木町  |

以上は戦前派の主な卸売業者であるが、このほかに多数の戦前派ウィンドベーカーリーがあることはいうまでもない。

三

現在の主な卸売パン企業を抽出すればあられました次の通りである。

主要卸パン店しらべ

| 区分  | 社名         | 代表者   | 所在地     |
|-----|------------|-------|---------|
| 大手  | タカキベーカーリー  | 高木俊介  | 安芸郡瀬之川町 |
| 〃   | 永井パン       | 永井勝一  | 安芸郡安芸町  |
| 準大手 | 広島屋パン      | 宗綱唯男  | 広島市草津本町 |
| 〃   | ムラコシパン     | 村越郁之助 | 広島市旭町   |
| 〃   | 天狗堂ベーカーリー  | 桑原久治  | 安佐郡安古市町 |
| 〃   | 川相製パン所     | 川相長市  | 尾道市栗原町  |
| 〃   | 広川日進堂      | 広川博重  | 福山市東深津町 |
| 〃   | 池田製パン所     | 池田友一  | 福山市御給町  |
| 中堅  | マツモトベーカーリー | 松本政尾  | 広島市草津南町 |
| 〃   | 神川製パン      | 神川恭一  | 広島市横川町  |
| 〃   | モトコ製パン     | 室戸一良  | 大竹市新町   |

|   |            |       |         |
|---|------------|-------|---------|
| 〃 | フジヤ製パン     | 藤井嘉太郎 | 呉市西谷町   |
| 〃 | メロンパン      | 中塩春馬  | 呉市本通り   |
| 〃 | イカリパン      | 田村充   | 呉市三城通り  |
| 〃 | 東食品工場      | 東日而男  | 呉市西本通り  |
| 〃 | 藤沢パン       | 藤沢茂   | 安佐郡佐東町  |
| 〃 | 西林製パン      |       | 安佐郡高陽町  |
| 〃 | 市川商店       | 市川仁市  | 尾道市十四日町 |
| 〃 | り製パン       | 阿松勉   | 尾道市高須町  |
| 〃 | キヤノンベーカーリー | 藤本忠夫  | 福山市西町   |
| 〃 | 福山製パン      | 徳永新太郎 | 福山市三吉町  |
| 〃 | チドリヤ製パン    | 井上林三  | 府中市高木町  |
| 〃 | 小川製パン所     | 小川杉一  | 芦品郡駅家町  |

以上の通りであるが、この二十三社のうち一〇社が戦前派でのこり十三社が戦後派である。そしてこの戦前派戦後派を通じての頂点に位するものが戦後派のタカキベーカーリーで、その存在は岡山木村屋と共に中国地方の双壁として知られている。

四

復員軍人（陸軍大尉）として、原爆に破壊された広島に帰還した現タカキベーカーリー社長高木俊介氏が、広島市比治山町の一角で、従業員四名の委託パン工場をはじめたのは、まだ日本人が食糧地獄に喘ぐ昭和二十三年であった。それから二十年後の今日のタカキベーカーリーは従業員一、〇〇〇名以上、売上年額二〇億円以上の大企業にのしあがったのだから、まれにみる高度成長といわなくてはならない。

現在のタカキベーカーリーの主力工場は、広島郊外瀬乃川町の日産一、〇〇〇袋工場であるが、広島市内比治山町、三原市、愛媛県松山市などにも工場があり、さらに広島市本通りの繁華街にはもと三井銀行支店を改装し



増設した豪壮なレストランをかねた中核サービスマン「アンデルセン」があり、呉、福山、尾道、岩国、長崎にもりつばなサービスマンがある。

そしてその経営面をみると、昭和三九年から従業員のW・S・T訓練方式を導入、経営の近代化、合理化につとめている。

この特色の一つは、幹部職員に自衛隊出身者が多いことであるが、それは命令服従の関係を円滑にして、組織としての戦力を強化するために、自衛隊出身者がよいということに社長が目をつけた結果である。なおこの従業員は男子と女子が殆んど同じ比率を占めているが、これは直売店やサービスマンが多いからである。経営の方針は中村屋に倣つて良品廉価主義を貫いているが、海外の新知識をとり入れることにも積極的である。

なお、広島県で最初に運行線の量産方式をとり入れたのは広島市のムラコシパンであり、それは支那事変の直前であった。戦後いちはやく箱車配達をトラック運搬にきりかえ、さらに機械包装方式をとり入れたのは永井パンであるが、このタカキ、ムラコシ、ナガイの三社がいまも広島県を代表する大手である。

それから広島県の大手は西隣の山口県東部地区、島根県西部地区、海をへだてて愛媛県の西部地区に進出しているが、その東部の福山、府中、松永、尾道、三原地区には東隣の岡山県の大手が進出している。

## 五

広島県にパン工業組合が呱呱のこえをあげたのは、太平洋戦争がはじまつた昭和十七年で、その初代理事長は川野政一氏であった。そのあとを継いだのが村越郁之助、木村八十二氏であるが、戦後は堀田、田村、中島氏を経て現在の永井勝一氏に至つている。

しかしこのほかにもこの県には福山、尾道方面を区域とする東部パン協（荻路義実理事長）と県北三次市中心の北部パン・メン協（朝枝正己理事長）がある。

## 広島県北部地区の部

### 〔広島県北部業界の沿革〕

本地区には広島市、呉市、福山市などは含まれていない。尾道市、三原市、三次市などを中心とする双三郡、高田郡、比婆郡、甲奴郡にわたる地域である。

この広島県北部地区のパン業も明治以来の長い年譜を持つている。明治三十一年に双三郡三次町十日市町（現三次市内）に県立三次中学校（現三次高校）が創立され、同校前にパン店が開業したのが本地区における製パン業の嚆矢である。

大正年代に入つて五年に三次町十日市町において朝枝源治氏（石橋製パン）が菓子とパンの卸業を始め、それと相前後して江草久二、寺本豊、沖田繁人、丸二屋らの諸氏がパンの製造を始めた。ついで大正七年に尾道市のオギロパン、大正八年には三原市のオギロパンが開業、その後昭和初年にかけて、川相製パン（尾道市）岡野製パン（因島市）佐々木製パン（三次市）、小原製パン（三原市）、タカガキ製パン（尾道市）などが相次いで創業した。

当時これらの製パン業者の多くは北備菓子組合に所属していたが、日支事変の勃発した昭和十二年にパン企業の確立をはかつて朝枝、丸二屋、沖田、小林、後藤、政岡、戸崎、矢野、久光らの諸氏は北備菓子組合を脱退して、広島県パン組合（理事長村越郁之助）に加入した。しかし大戦中の小麦粉の統制、企業の整備により本地区の製パン業者は朝枝源治氏を残して全員転廃業し、パンの小売は食糧営団に吸収された。

終戦後の昭和二十一年に石橋製パン（朝枝源治氏）とアサエダ製パン（朝枝理三氏）は、農林省配給パン委託加工工場に指定されて、配給パンの製造を行なつた。当時食糧不足のためにパン食が普及し、本地区内にも多数のパン業者が乱立したが、年とともに次第に自然整理されていった。

昭和二十五年三月に双三郡、高田郡、比婆郡、甲奴郡（三次市庄原市を合

む)内のパン業者三四名が十日市町西寛寺に参会して、広島県北部パン協同組合(理事長後藤豊三郎、専務理事朝枝源治)を創立した。この組合は同二五年十月に広島県北部パン協同組合と改称した。

以後この組合は小麦粉、砂糖、イースト、油脂、ジャムその他の資材の共同購入を行ない、従業員や家族の表彰と慰安、パンや菓子等の講習会、見学旅行など、購買、厚生、親睦の事業活動を行なっている。

広島県北部パン協同組合が行なってきた主な事業と行事をつぎに記してみよう。

昭和二十九年には和菓子等の講習会とパンの講習会を開き、地区別対抗の軟式野球大会を行ない、昭和三十年には日油後援の下に講習会を開催した。昭和三十一年には組合が自主的に衛生週間を実施し、各パン工場の衛生施設の充実をはかり、ポスターを作成し配布した。昭和三十二年には全パン連主催のパン祭に参加し、本地区内で賞金一万円当選者一名トースター当選者二八名を出した。昭和三十三年には広島市食品試験場で学給製パンの講習を行なつた。

昭和三十五年には県下四地区のパン組合が協調して日額二〇五円の最低賃金制を実施し、三十七年に二六〇円に改定、三十九年に三五〇円、四十年に四〇〇円、四十一年に四四〇円に改定した。

昭和三十六年には組合創立十周年記念式に組合員工場の従業員の十年と五年の勤続者を表彰、三十八年には永年勤続の組合役員を表彰した。

この組合は創立以来今日まで引続き小麦粉、バター、ジャム、水飴、イースト、包装材料などを、毎年北部地区全需要の九五%にあたる分量を共同購入して、組合員に大きい利益を提供している。また家族や従業員のリクレエーションに力を入れ、毎年有意義な県内外の慰安旅行、見学、親睦行事を行なっている。

#### 広島県北部の調査(二〇社)

調査対象 二〇社(尾道市八、三次市三、三原市二、因島市一、御調町

#### 二、その他四)

調査内容 本調査は尾道市、三次市などを中心とする広島県北部パン組合所属の製パン企業体二〇社の調査である。

(1) 業態 二〇社中卸売を主とするもの一八社で大多数をしめ、小売を主とするものは二社にすぎない。また卸売業一八社の中学給パンを行なっているもの一四社に達している。さらに製造しているパンの種類によつて区別すると、食パン、菓子パンの両方をつくっているもの一四社、食パンのみをつくっているもの二社、菓子パンのみをつくっているもの三社、不明となつている。

(2) 創業期 本調査中で創業期がもつとも古いのは石橋製パン(三次市)で、大正五年の創業である。ついで尾道市と三原市の両オギロパンがそれぞれ大正七年と大正八年の創業で古く、大正十二年にはアサダ製パン(三次市)大正十三年には川相製パン(尾道市)が創業している。昭和元々八年の期間に、岡野、佐々木、小原、タカギの各製パン所が創業しているが、その他の一社はすべて昭和二十年の終戦以後の創業であり、特に昭和二一〜二五年の五年間に九社が開業している。

(3) 代表者の代目と年令 調査企業体二〇社の代表者二〇名の中、初代が十七名、二代が三名、三代以上はなしで、初代が圧倒的に多い。代表者の年令は七〇才以上一名、六〇〜七〇才七名、五〇〜六〇才五名、四〇〜五〇才五名、三〇〜四〇才二名となつている。

(4) 技術系統 木村屋系二、向島住田系一、中国で中国人より習得一となつているが、木村屋系の一社は岡山市の木村屋(梶谷忠一氏)の初代職長から技術を伝えられている。その他弟の仕事の手伝いから、神戸で修業したなどがあるが、技術系統は不明である。

(5) 窯と製パン機械 大正時代と昭和初年に創業したパン店はすべて石窯か煉瓦窯を使用しているが、終戦後に開業した店の中にも石窯煉瓦窯を採用しているものがある。電気窯とガス窯の使用もかなり早く、両オギロパンはともに大正十年にガス窯を、大正十二年に電気窯を採用している。

さらに昭和四年に川相製パン（尾道市）が、昭和十二年に佐々木製パン（三次市）が昭和十三年に小原製パン（三原市）が電気窯を採用している。しかし電気窯の使用が普及したのは終戦後である。

現在ガス窯の使用者は五社、オイル窯の使用者は三社となっている。

窯以外の製パン機械ではミキサの使用がもつとも早く、現在もつとも広く普及している。ミキサを始めて使用したのは昭和九年川相製パン所（尾道市）であるが、終戦までに他の六社がミキサを採用している。デバイダーとモルダーも昭和十三年に川相製パン所が採用したのが最初であるが、その他の業者はすべて終戦後に使用を始めている。現在モルダーは二〇社全部が使用しているが、デバイダーは使用していないものが八社もある。

自動包装機その他を使用しているのは七社で、いずれも昭和三五年以後の採用である。

(6) 発酵法の推移 ホツプス種使用の食パン製造を報告しているのは石橋製パン（三次市）と川相製パン（尾道市）の二社であり、前者は大正五〜九年の期間に、後者は大正十三年〜昭和三年の期間にホツプス種を使用している。南京種の使用を報告しているのは両オギロパン（尾道市と三原市）のみで、その使用期間は、大正八〜一〇年である。

酒種使用の菓子パン製造を報告している業者は九名であるが、大正末期から昭和初年にイースト種に変えたものが多い。しかし昭和一五〜二〇年まで酒種を使用した業者もある。イーストをもつとも早く使用したのは昭和二年の石橋製パン、昭和四年の川相製パン、昭和五年の岡野製パンなどである。終戦後三年間米国製のドライ・イーストを使用したと報告しているもの（片野製パン）もある。

配達方式の推移 パン配達方式の箱車時代を記しているのは佐々木製パン（三次市）のみであるが、昭和六年で終つてゐる。リヤカー時代を報告しているのは一〇社で、二社は、大正七年にやめてゐるが、他の八社は終戦後も継続しており、昭和三二年までリヤカーを使用したものも一社ある。

貨物自動車は昭和十二年頃から二、三社が採用したが、終戦後特に昭和二五年以後急速に普及し、現在調査した二〇社中の一九社が使用している。自転車を使用しているものも三社ある。

(8) パンの種類 他の府県と同じく大多数のパン業者は食パン、菓子パンの両方をつくつており、広く普及していることを示している。直焼きパンも大正五〜七年頃から三次市、尾道市、三原市で始まり、現在二〇社の八社がつくつてゐる。スリート製品の製造は昭和三十年頃から始まり、現在七社がそれをつくつてゐる。

(9) 雇傭関係の推移と労組 年季奉公制度を報告しているのは二〇社中の八社であるが、それをやめた年代についての記録は昭和元年から昭和十八年までの各年にわたり明確な廃止期を示していない。終戦前に四社が終戦後に四社が古い年季奉公制度に別れを告げている。終戦後開業の一社中九社は最初から徒弟制度を使つていない。

従業員組合の成立を報告しているのは橋和精和堂（御調町）一社だけで昭和二六年にできてゐる。

(10) パンを始めた動機 創業期の古いパン業者の動機には小資本でできたから、徒弟から独立開業、船員生活がいやで転職などがあり、終戦後に開業した業者の動機は戦後の食糧不足を見て、復員や外地引揚後の職業として、パン業が有望と考へてなどである。他の製パン工場を買収または引継いで開業したのも二社ある。

広島県の部（二〇社）

| 創業期  | 社名         | 所在地 | 代表者名 | 年令代目 | 卸売 | 直売 | 学給 | 営業形態 | 技術系統 |
|------|------------|-----|------|------|----|----|----|------|------|
| 大正五年 | 石橋製パン      | 三次市 | 朝枝源治 | 七六初代 |    | ○  |    |      |      |
| 〃    | 七年オギロパン    | 尾道市 | 荻路義実 | 六五初代 |    | ○  |    |      |      |
| 〃    | 八年オギロパン    | 三原市 | 荻路幸一 | 六九初代 |    | ○  |    |      |      |
| 〃    | 一二年アサエダ製パン | 三次市 | 朝枝理三 | 六六初代 | ○  |    |    | ○    |      |

